

やきもの戦争

兵器になった食器

■1■

計百本ほど納入されたが、軍が期待した成果が上がらなかったとして本格生産は実現しなかったという。

少量の火薬で

日ごろ何気なく使う湯飲みや茶わんに代わり、兵器が東彼波佐見町など全国の焼き物の産地で作られた時代がある。平和産業といわれた焼き物が軍需産業に「転身」した戦時中のことは、あまり知られていない。五十二回目の終戦記念日を機に、関係者の証言や少ない資料で半世紀前の歴史の空白をたどった。

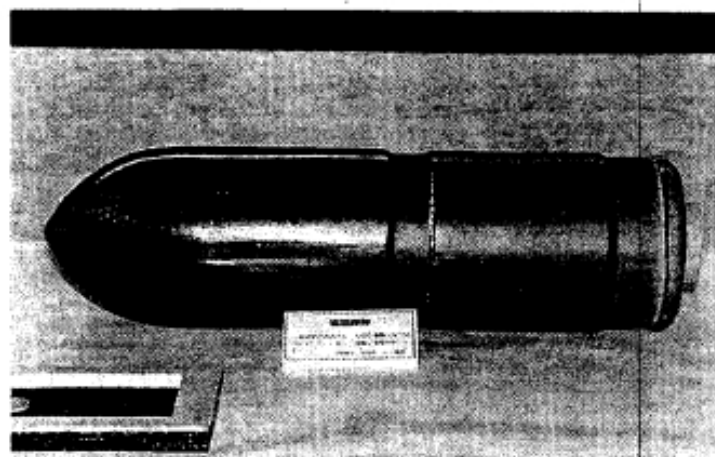
「実際使わず」

「磁器爆弾」と表記した

が、規格が大きいため真円、つきりしない。当時を知るに焼き上げるのに苦労。同郷土史家は今年一月亡くな

使った目的があったのではな

爆弾



有田町歴史民俗資料館に展示されている磁器爆弾の弾体。何に使おうとしていたのか

で爆破でき、熱に弱いベスト型を爆発の時の熱で殺さなくてはならなかった。中国から地理的に近い有田地区で試験的に作らせたことは考えられる」と言う。実際、佐賀県内では戦時中、七三一部隊の細菌爆弾の弾体を軍関係者監視の下で、ひそかに試験製造した歴史があった。

関係書類焼く

十四年前の佐賀新聞は「工場」の意はすべて外部からのぞけないようにふさがれ、製品は火鉢の間に挟み隠して焼かれた。完成品は赤十字のマークの入った木箱に丁寧に詰められ、軍用トラックで運び出された」と関係者の証言を掲載している。有田の磁器爆弾の弾体と細菌爆弾の弾体は形状が違い、磁器爆弾の使用目的のなぞは残る。戦後、焼き物産地で、連合軍上陸に備え関係書類を焼却するなど証拠隠滅を図ったことが、戦時中の業界の歴史に空白を生じさせた。

細菌戦用？佐賀県で製陶

う弾製造に切り替える。

磁器爆弾の試作品実験が

大村航空隊で行われ、佐世

でも四三年ころ、陸軍航空

古川さんの推測だ。

有田地区で製造された磁器

細菌爆弾の弾体は形状が違

地元の土史家の資料によ

保の航空隊に納められたと

本部分の命令でひそかに

この弾体と細菌戦を結び

「赤痢菌をしかにまき」

属の爆弾と違い少量の火薬

生じさせた。

「防災効果破たん」

調整池内が汚水化してい

対応した県議早瀬千拓室

きたとしても二十日以降に

を合わせる姿が見られた。

やきもの戦争

◆兵器になった食器

■ 2 ■

て作ったのではないかと話す。

「鉄材も不要」

しかし、その威力は軍関係者の期待にはたえられなかったようだ。呉の海軍工廠で実験したら、小さく砕け過ぎて殺傷力がなく、

「あなたが取材に来るのしたと聞いた。戦後、その要請で最大一日二万六千が発覚すると海軍に処罰 個製作、最初納入分の相当 砕け過ぎて殺傷力がなく、

手りゅう弾

波佐見製など殺傷力欠く

信管の取り付け口が上にある、そこから火薬を詰めるようになっていた。

弾体「コロコロ」

二つに分けて作った半球をつなぎ合わせて二つにした。球形は転がりやすいので輪に広げたわら編の上に載せて乾燥させたという。幼かった今田社長は製作に携わっていないが、工場の至る所に製作中の弾体が「コロコロ」していたのを覚えている。

「軍の指示を受けて製作

されるところがわきがあり、

すべて土中に埋めて隠した島へ送られた。四五年六月、よつだ。今田社長が見せた軍の命令で生産中止になった」と記す。

磁器や陶器製の手りゅう

弾は佐賀県有田町、愛知県瀬戸市、滋賀県信楽町でも作られた。日本陶業連盟の「概説近代陶業史」に、一九四四年夏、ろから試作していた愛知県の磁器(磁器)は「当時うわさがあつた米軍の宮崎上陸を想定し

波佐見、有田で作られ

た磁器製手りゅう弾は実

際使われなかったといわ

れている。戦時中、海軍

の技術士官だった有田町の

の磁器組合代表が「陶器製

の地雷なら金属探知機にも掛

からず鉄材も不要」と売り

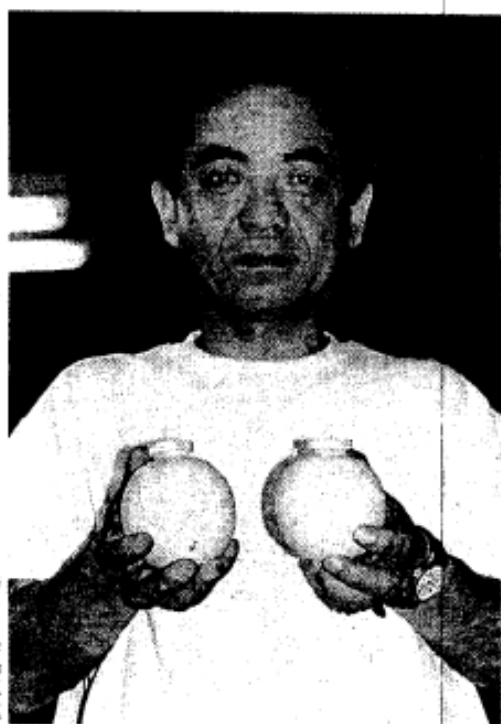
込み、奏功した結果とい

うが、当時の勝利に何の疑

いかなかったとい

うが、当時の勝利に何の疑

いかなかったとい



東彼波佐見町の今田さんの工場で戦時中作られていた磁器製手りゅう弾

う。残った製品は戦後、進駐軍を恐れて、やはり埋めてしまった。

この地雷について防衛庁戦史資料室は「当時どが担当したかわからないが、使われていても装甲車を破壊するような威力はなく、兵士を殺傷するくらいだったのでは」と言う。

滋賀県信楽試験場は磁器製地雷(直径三十一・三十五センチ、高さ五十五センチの筒型)の試作も行った。だが、その記録も含め四十一・四十五年の業務報告書は全く残っていないという。

地雷の試作も

松本さんは当時、この地が沖繩で使われる話を聞いたが、実戦で使われたかの業務報告書は全く残っていないという。

やきもの戦争

兵器になった食器

■3■

B29の迎撃用

一方、全国の焼き物産地が軍の指示を受けて共同で取り組んだ製品に、戦争末期に日本がひそかに開発を進めていた有人ロケット戦闘機「秋水(しゅうすい)」の燃料製造用装置類があった。

戦時中、焼き物産地で作られていた有田町の竹重米雄は、準備を進めていた。とろろ材料の銅やスズ、アルミニウム・ハゲ。現在の二田玉直四五年六月の空襲で被災、同機は、日本が本土爆撃で苦しめられた米軍機B29の迎撃用、高度上空を飛ぶ貨で代用する措置。当時使われていた十銭と五銭、一銭の三種類を京都市、愛知県瀬戸市、佐賀県有田町の工場で分散製造した。

戦時中、焼き物産地で作られていた有田町の竹重米雄は、準備を進めていた。とろろ材料の銅やスズ、アルミニウム・ハゲ。現在の二田玉直四五年六月の空襲で被災、同機は、日本が本土爆撃で苦しめられた米軍機B29の迎撃用、高度上空を飛ぶ貨で代用する措置。当時使われていた十銭と五銭、一銭の三種類を京都市、愛知県瀬戸市、佐賀県有田町の工場で分散製造した。

幻の製品

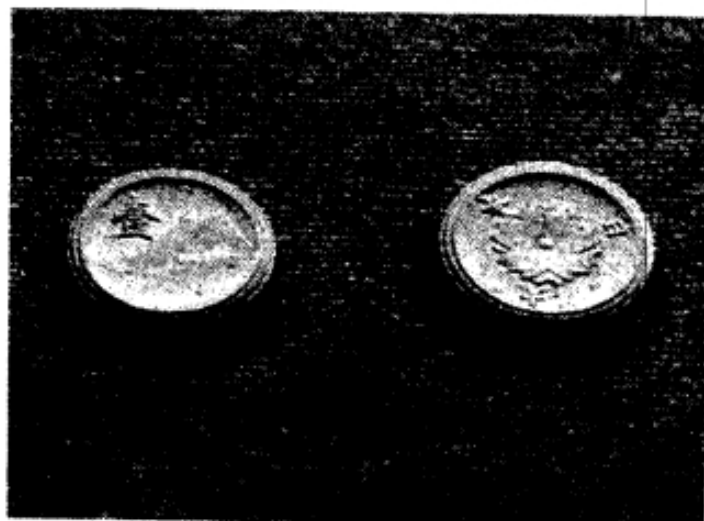
ボタン製造機で陶貨

大阪造幣局などによると、一九四四年一月より非金屬貨幣の研究が始まった。四五年三月の陶貨試作品の衝撃・破壊試験では、四月の官報で告示、六月から流通させる予定だった。タイルや服のボタンを作

イン。色は銅に似せて茶褐色にされた。竹重さんの工場は造幣局が目を見ないまま処分して、三万台を揃え、指示され、一日三百枚作る計画で、校も同じ運命だった。

官報での陶貨の告示は結局行われず、貨幣として目的は大きかった。潜水艦で取り寄せたドイツのロケット戦闘機設計図を基に、軍部と三菱が中心になって取り組み、長崎

市にあった三菱兵器長崎製造所でもエンジンの研究開発が行われていた。ロケット戦闘機の液体燃料は全国の化学工場で作られ、田町では五社が指定を受けて、貯槽類やパイプ、バル



流通しないまま処分された1銭陶貨。富士山の絵がある左側が表で右側が裏。フなどの製造にかかった。

試験飛行1回

名古屋方面で製造に当たった工場の監督官として派遣されていた元海軍士官、岩尾照さん(右)「有田町在住」の話だと、ロケット戦闘機一回の出撃に四つの燃料が必要で、四五年末までに三千機生産する軍の計画に合わせかなりの設備が求められていた。

だが、ロケット戦闘機は、試験飛行を一回実施したただけで敗戦を迎える。

火鉢の製造技術があったため、高さ一・二メートルの大型瓶(かめ)を二百個作るよう命令された竹重さんの工場では、出荷の荷造りまでしながら終わった。瓶は戦後、米などの貯蓄用に農家に引き取られていったとい

【口加】太平洋戦争中に軍に徴用され沈没した

うち約九百六十七人は島

原半島出身だった。

り返さない」との決意を新